

「足尾に緑を育てる会」をつくり、鉱山開発によって表土さえも流失し、荒廃しきった足尾の山に植林活動を始めてから早や七年の歳月が流れた。私たちは、毎年四月の第四日曜日に植林を呼びかけてきたのである。

その呼びかけとは「苗を持ってきてください」「土を持ってきてください」「スコップや唐クワや雨がっぱや弁当を持ってきてください」「来てくれた人全員から千円をいただきます」というものである。こんな呼びかけにもかかわらず、今年は六百五十人も人が来てくれ、岩だらけの急斜面にへばりついて木を植えた。

そもそもの出発点は、平成七年に桜の苗木を構えて花見でもしようかということであった。私の母は足尾出身の家に生まれ、私は子供の頃から樹木のない赤茶化した山をよく見知っている。

足尾は明治時代以来の日本の富国強兵策を支えてきたところで、日露戦争の砲弾・銃弾などの材料の鋼を供給してきた鉱山だ。

光があれば、必ず影というものはある。過度の生産に追いまわられてきた鉱山は、周りの樹木を無計画に伐採し、山林を荒廃させてきた。源流域が荒廃すれば保水力がなくなり、鉄砲水が出る。下流一帯にたびたび洪水が出て源流域の鉱毒がまき散らされたのが、世に言う足尾鉱毒事件であった。

日本の公害第一号の足尾鉱毒事件と対峙したのが田中正造であり、その主張は治山治水ということであった。洪水を起こさないためには、堤防の嵩上げ（かさあげ）などをするよりも、源流域の山を保全することである。

田中正造は当時、衆議院議員であったが、その主張は受け入れられず、議員を辞して明治天皇に直訴した。自らの命を捨てて世論を目覚めさせようとしたのである。しかし、すでに老年であった田中正造は、天皇の馬車まで行く着く前に転倒してしまい、死ぬことはかなわなかった。だが、世論は大いに盛り上がった。

田中正造が死を賭して直訴してから今年で百一年日である。足尾の風景には、かなり緑が回復してきたとはいえ、表土がないので自然な回復は見込めず、基本的な風景は田中正造の時代のままであるといえる。

平成七年に花見をしようと冗談のごとく植えた十本の桜の苗木は、あっけなく枯れてしまった。その反省もあり、苗の根の周りには、しつかりと土でくるまなければならぬ。

田中正造が治山治水を訴えて立ち、百年の歳月が流れ、こうして足尾に植林活動をするボランティア活動が根づいている。これも田中正造が蒔いた種なのだ、と私は考えている。

これまで土砂降りに見舞われ、危険な時もないわけではなかったが、今年は気持ちのよい晴天であった。いつもはちょうど山桜が美しい季節なのに、今年は暖かい日がつづきすでに散ってしまった。毎年、季節の流れは少しずつ変わる。今年も足尾の植樹が終わって、ほっとしている。